日本の国生みと神生み伝説

天上界の天の浮橋から日本の国を創り出す伊邪那岐神と伊邪那美神

製作・編集　上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会　会員）

国生み伝説 第1話 万物創世の話

世界の始まり：別天津神から神世7代へ

この世界は大きく分けて天の世界である「高天原」、地上の世界である「葦原中国」、あの世の世界である「黄泉の国」そして、あの世とこの世をつなぐ「根の堅州国」に別れると言われる。

この世界はまず、天と地が生まれます。そして天の高天原から1柱の神が登場し、それが「天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）で「至高の根源」を司る神で、続いて「高御産巣主神」（タクミムスビノカミ）という「統治」を司る神、続いて「神産巣日神」（カミノムスビノカミ）という「生産」を司る神と続けて3柱の神々が生まれては消え、その時現れた3柱の神々を総称して「造化の三神」と呼んだ。

ただ、当時地上の世界ではまだ陸地と呼べるものはなく、地表が海に浮かぶ油のように海面を漂っており、そこに「宇摩志阿斯訶備比古遲神」（ウマシアシカビヒコデノカミ）と「天之常立神」（アメノトコタチノカミ）という2柱の神々があらわれましたが、この神々も現れては消えて行きました。

このように最初に現れては消えていった神々を総称して「別天津神」（コトアマツノカミ）と呼び、これらの神々は性別をもっていなかったという。

その後神々には大変な変化があり、「男神と女神」が登場します。こうして神々は世代を繰り返すことにより、次第に人の姿や形に近づいて行き、伊邪那岐（イザナギ）と伊邪那美（イザナミ）の世代で完全なる一対の男女神となり両神は最古の夫婦神として多くの神々を生み続けることになります。

「伊邪那岐神と伊邪那美神」の二柱の神様に国造りの為に「天の沼矛」という矛を授けられた。二柱の神様は「天の浮橋」という大きな橋の上に立ち、下界の様子を眺めて見ると、国はまだ水に浮いた油のように漂っていました。早速、伊邪那岐命と伊邪那美命は神々より授けられた矛を海中に挿し降ろし、海水を力いっぱい掻回し始めました。しばらくして矛を引き上げてみると、矛の先から滴り落ちる潮が見る間にも積り重なってオノゴロ島という島が出来上がった。そして二人の神様はその島に降り立つと、天の御柱という大変大きな柱を立て、柱の回りを伊邪那岐命は左から、伊弉冉命は右からそれぞれ柱を廻り合いました。

※他の説では、二神はそれぞれ右と左に別れ島を廻り、巡り合った所に住み、契りを交わしたという。

そこで二神は契りを交わし、二人で多くの島々を生みました。初めに淡路島（淡道之穂之狭別島）、次に四国（伊予之二名島）、隠 岐の島（隠岐三子島）、九州（筑紫島）、壱岐の島（伊岐島）、対島（津島）、佐渡島を次々と生み、最後の本州（大倭豊秋津島）を生みました。

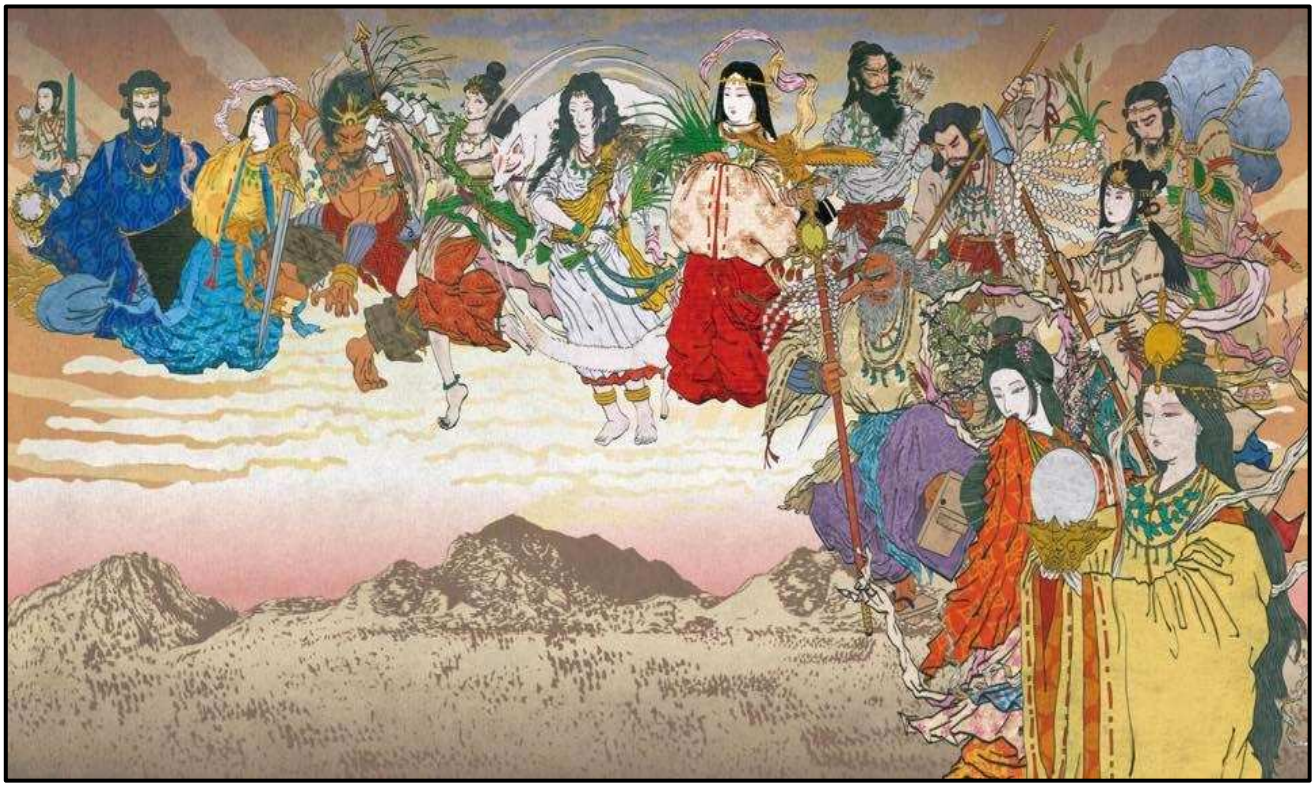
八つの島が生まれたところから、これらの島々を大八島国と呼ぶようになり、日本の国土の始まりと言われます。

第2話 神生みの話

伊邪那岐命、伊邪那美命の国生みによってこの世界には、立派な大陸ができ、今度は本格的な神々を生み落とす「神生み」に入ります。その数は実に膨大で、とにかく登場する神々の名は多く、非常に分かりにくい部分もありますが、私たちの生活においてとても重要な神々が生まれて来ました。

※それぞれの神の御利益については、インターネットの資料「日本の神様と御利益一覧」を参照下さい。

まず「大事忍男神」（オホコトオシヲノカミ）が生まれますが、これは「大事を耐え忍び達成した」という意味とする指摘が多くあり、本来はもっと後に登場すべきところですが、誤ってここに入れたと思われえる。次に家宅六神と言われる「石土毘古神（イワツチヒコノカミ）を筆頭に、「石巣比売神」（イハスヒメノカミ）、大戸日別神（オホトヒワケノカミ）、天之吹男神、（アメノフキヲノカミ）、大屋毘古神（オオヤビコノカミ）、風木津別之忍男神（カワモツワケノオシヲノカミ）の6柱の神々生んだ。



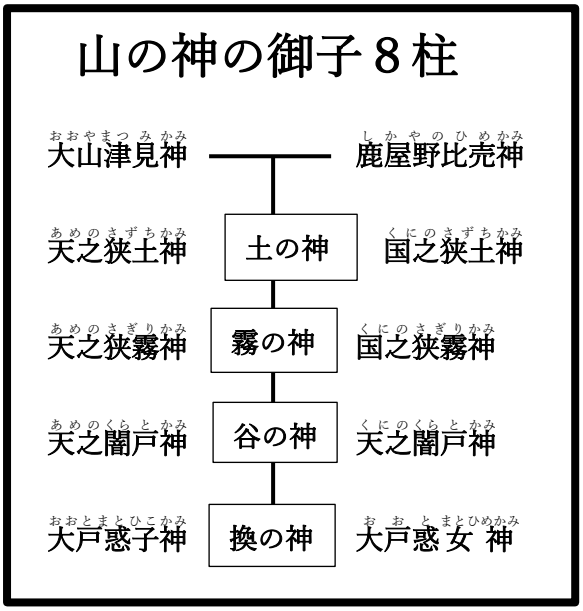
続いて生まれる7柱の神々は、自然そのものを司る神々で「大綿津見神」（オホワタツミノカミ）を筆頭に「速秋津日子神」（ハヤアキツヒコノカミ）「速秋津比売神」（ハヤアキツヒメノカミ）「志那都比古神」（シナツヒコノカミ）「久久能智神」（ククノチノカミ）「大山津見神」（オオヤマツミノカミ）「鹿屋野比売神」（カヤノヒメノカミ）という神々がこれにあたる。

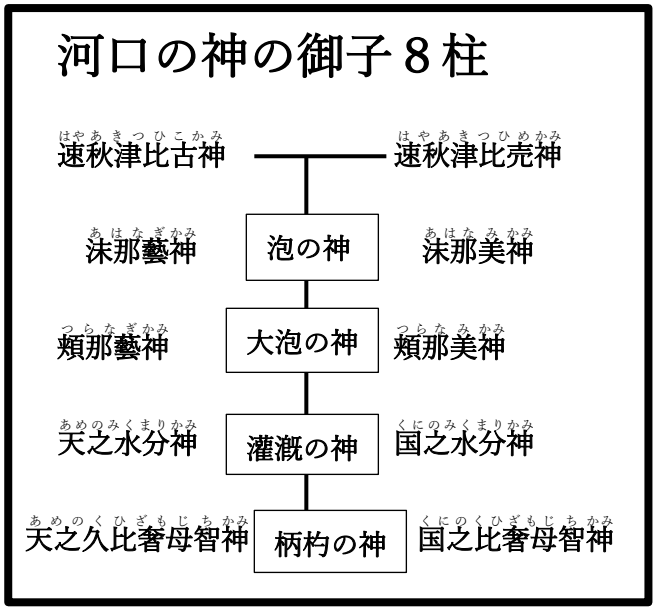
後に登場する「底津綿津見神」「中津綿津見神」「上津綿津見神」の総称も綿津見神と呼び、「大綿津見神」と似ていますが、その具体的な関係は不明。

大山津見神（大山祇神）に関しては、「山の神の僧も知締め」とされている。しかし別名で「和多志大神」の名を持ち、「ワタ」が海を表すことから「海神」としての性質も持っているのではないかとも言われる。

また、金運の神としても祀る神社もあり、これは山の幸・海の幸といった自然から採取できる恵みを統括していることから、豊かさを示す金運と結びつけていると思われる。 そして最後に、人類の英和へと繋がる神々が3柱誕生する。最初に登場するのは「鳥之石楠船神」（トリノイハクスブネノカミ）と言い、「神様が乗る船の名」を司

る神で、別の名を「天鳥船」（アネノトリフネ）とされ、「建御雷之男神」（タケノイカズチノカミ）が出雲の地に国譲りの為に降　臨する際にも登場している。そして「大宣都比売神」（オオゲツヒメノカミ）は、五穀登場の話にも登場する「穀物の神」で、最後に「火」を司る神の「火之迦具土神」（ヒノカグツチノカミ）を迎えます。
ある意見「船」「五穀」「火」という組み合わせは、人類の発展を劇的に変化させたものとして、大変重要なことを伝えていると思われる。しかし、最後の「火之迦具土神」の「火」という性質を持っていることから、結果として「伊邪那岐命」と伊邪那美命」の大いなる悲劇に繋がることになる。





伊邪那美命の悲劇とは、「火の神」の「火之迦具土神」を生むと陰部に大やけどを負い、病床で苦しみます。その嘔吐物や糞尿からも6柱の神々が生まれた。これらの神々は、私たち人間が生きてゆく上で最も重要な産業を司る神々となった。金山毘古神（カナヤマビコノカミ）と金山毘売神（カナヤマビヒメノカミ）は「鉱山」を司る神で、鉱業や金属加工の神とされ、続く「波邇夜須毘古神」（ハニヤスビコノカミ）と波邇夜須毘売神（ハニヤスビメノカミ）は伊邪那美命の大便から生まれ「土」を司る神とされている。そしてこれまでの2組は、両神とも性質の神々が男女に分れて誕生してきましたが、最後の一対の神々は他と少々異なり、一対としながらもその性質は異なり彌都波能売神（ミツハノメノカミ）は「水」を司る神となり、和久産巣日神（ワクムビノカミ）は「穀物や養蚕」を司る神とされている。そしてこの両神から生まれる神は「豊宇気毘売神（トヨウケビヒメノカミ）と言い、伊勢の下宮こと、豊受大神宮に祀られる食物神となる。
こうした糞尿や汚物が自然の恵みとして、新たな生命を司ること非常に重要な場面の一つになります。しかし、こうして悶え苦しんだ伊邪那美命は残念なことに、ここで亡くなってしまいます。伊邪那岐命は、亡き妻の遺体を比婆山に埋葬しますが、伊邪那美命を失った悲しみは深く、その怒りの矛先は伊邪那美命が亡くなる直接的な要因となった「火之迦具土神」に向けられてしまいます。そして「火之迦具土神」は、実の父である伊邪那岐命に斬り殺されてしまいました。その時使った十拳剣（とかのつるぎ）か

ら飛び散った「火具土神」の血や遺体の各部それぞれから16柱の神々が誕生したという。特にその飛散した血液から生まれた神々は、今後のストーリーを占う上でも非常に重要な神様も含まれている。最初に「石折神」（イハサクカミ）と「根折神」（ネサクカミ）が、一対の神として生まれ、「岩根さえも裂く剣の威力」を司る。続く「石筒之男神」（イワツツノヲカミ）は、「剣を鍛える槌」を司り、甕速日神（ミカハヤヒノカミ）は、「火」の神を継承します。そして「闇淤加美神」（クラオカミノカミ）は一対として闇か谷を示すことから「谷合の水」または「井戸」を司ると言われている。

また淤加美は、龍を意味する古語とも言われ、谷の水を司る竜蛇神であるという説もある。そしてこれが日本書紀では「高龍神」（タカオカミ）と同一とされ、ニズノメと同じく、水の神を司る神様として大変有名な神様という。

最後に誕生したのが「建御雷之男神」（ワケミカズチノカミ）で、最も有名な神と言われる。「建御雷之男神」は武神として非常に有名で、「刀剣」を司る神とされています。もちろんこれらの神々は本来「火之迦具土神」の肉体から生じた為、その親は「火之迦具土神」と言いたいところですが、別の見方をすれば、これらの神々は、十拳剣から生まれたとも言え、十拳剣の精霊神となる天尾羽張（アメノヲハバリ）が後に「建御雷之男神」の父神として登場するが、その解釈は少し分かりにくいと思う。

しかし「伊邪那岐命」は、結局のところ「火之迦具土神」を斬った処で「伊邪那美命」は帰っては来るはずはないので、悲嘆にくれ「伊邪那美命」に会うために、死者の国である黄泉の国に向かうことを決意した。黄泉の国は日本の神話に出て来る死者の世界で、いわゆる「あの世」の世界です。「伊邪那岐命」は黄泉の国へと通じる黄泉比良坂を訪れ、そのまま黄泉の国との境にある「根の堅州国」（ねのかたすくに）へと向かいました。

しかし、時すでに遅く「伊邪那美命」はすでに黄泉の国の物を食べてしまい、元の国には帰ることが出来ない体になっていた。それを知らない「伊邪那岐命」は、「伊邪那美命」の近くまで訪れ、扉の向こう居るであろう「伊邪那美命」に対し「なぜこんなに早く死んでしまったのだ、もう一度力を合わせって国造りに励もうではないか」と共に帰ることを提案する。しかし、既に黄泉の国の住人になってしまった「伊邪那美命」にとっては、大変難しいことでした。しかし、「伊邪那岐命」の熱意に負け「伊邪那美命」は、黄泉の国の神々に掛け合うことにしましました。但しそれは時間の掛かることで、「決して扉の中を見てはいけない、少し待っているように」と言い残しその場を離れました。しかし、なかなか返事が来なかったので「伊邪那岐命」はしびれを切らし、約束を破り扉を開いてしまいます。すると「伊邪那岐命」の目に飛び込んできたのは、8柱の雷神をまといながらも体が腐敗し、ウジ虫の湧く「伊邪那美命」の変わり果てた姿でした。驚いた「伊邪那岐命」は、その場を逃げ去ろうとしますが、約束を破り姿を見られた「伊邪那美命」は怒りに震え、逃げる「伊邪那岐命」を追いかけ、先ずは「伊邪那岐命」の元に黄泉醜女（よもこしこめ）が遣わされます。黄泉醜女は、黄泉の国に住む鬼女で、ひとっ飛びで千里を走る駿足の鬼女でした。迫りくる黄泉醜女に対し「伊邪那岐命」は先ずつる草で出来たクロミカズラ（髪飾り）を投げつけます。するとそこから山ぶどうの実が実り、黄泉醜女の注意をそらすことが出来ました。しかし、黄泉醜女は山ぶどうをすべて食い尽くすと、すぐさま「伊邪那岐命」を追いかけ直します。続いて「伊邪那岐命」は、角髪（みずら：太古人の髪型の一種）から

櫛を取り出し、その櫛の歯を折って投げつけました。すると今度は、ニョキニョキとタケノコと生えてきて再び黄泉醜女の注意をそらし、何とか逃げ切る事が出来ました。そして生と死の境である黄泉比良坂付近まで逃げ延びてきたところで、今度は雷神が黄泉の醜女の軍勢を率いて、「伊邪那岐命」の元に迫りました。「伊邪那岐命」は、その場に生えていた桃の木から実を3つ程もぎ取り、迫りくる軍勢に投げつけました。すると黄泉の醜女たちは何故かその場から逃げ去ってしまいました。こうして「伊邪那岐命」は、桃の力で助けられ無事に黄泉の国から逃げ帰ることが出来たという。

そしてその入口を千引岩（ちびきいわ）で塞ぎました。

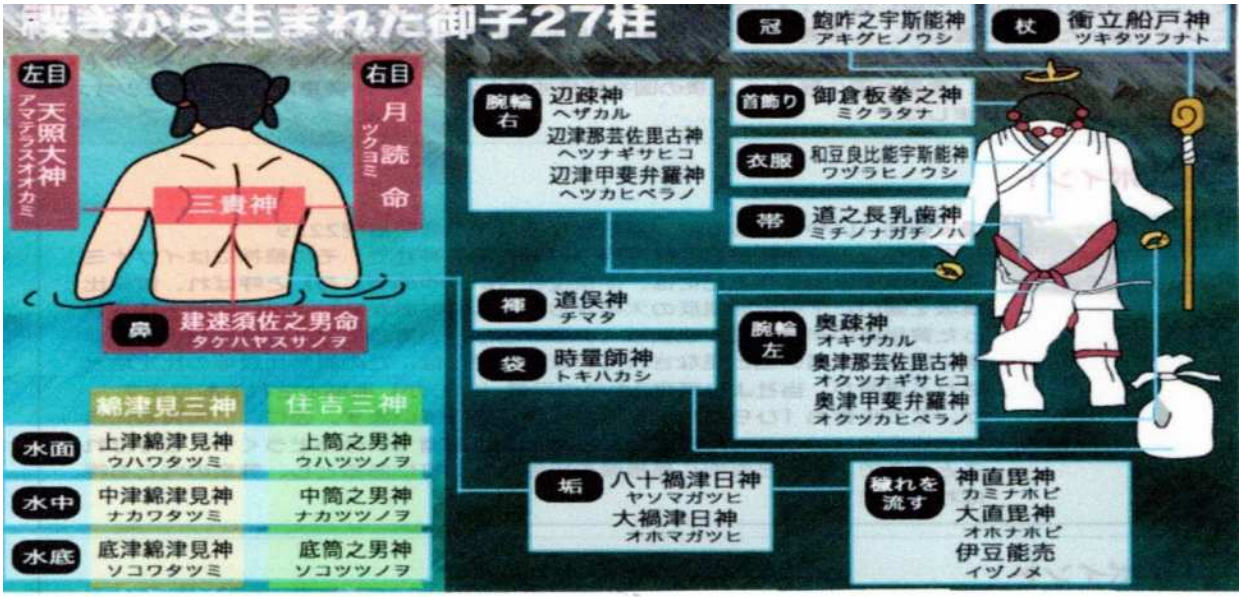
すると岩の扉の向こうから「伊邪那美命」が「私は死の国の神となって地上の国の人達を毎日千人殺します」と叫びました。すると伊邪那岐命」は「それでは私は毎日千五百人の子どもを誕生させよう」と答え、こうして中睦ましかった「伊邪那岐命と伊邪那美命」は別々の道を歩んでゆくことになった。この問答の意味は、一説には「人は多く死んでいくが、人口は何故か増え続けてゆくという人口増大」について語ったと言われ、人の寿命について触れた最初の記述と言われている。

そしてこの時、桃の木に助けられたことから、その感謝の証としてこの桃に「意冨加牟豆美命」（オオカムズミノコト）という名が付けられた。「伊邪那美命」は黄泉の国に残り、黄泉の国を統括する女神として「黄泉津大神」（ヨモツオオカミ）と呼ばれるようになった。

※「千引岩の由来」は、この時の問答がもとで名付けられたという。

何とか地上の世界に逃げ帰った「伊邪那岐命」は、黄泉の国で穢れた体を清めるために、一路日向の阿波岐原に向かいました。そこで禊ぎを行った。これが「禊ぎ」が登場した最初という。その禊ぎから、なんと27柱もの神々が誕生したという。

伊邪那岐命の禊ぎから生まれた神々



生れた部位	神の名前	神々の種類
杖（つえ）	衝立船戸神（ツキタツフナトカミ）	疫病や災害をもたらす悪霊の侵入を防ぐ神
褌（ふんどし）	道俣神（ミチマタカミ）道祖神と同じ	村への侵入妨害を目的とする神
帯（おび）	道之長乳歯神（ニチノナガチハカミ）	長い道の神
衣服（いふく）	和豆良比能宇斯能神（ワヒラノウシカミ）	苦しみや病からの回復の神
冠（かんむり）	飽咋之宇斯能神（アキグヒノウシカミ）	口を開けて穢れを喰らう姿で「厄除け」の神
首飾り（くびかざり）	御倉板拳之神（ミクラタナノカミ）	御倉の棚の上に安置する動作の神
袋（ふくろ）	時量師神（トキハカシカミ）	袋の口を開ける神
左の腕輪（うでわ）（手袋）	奥疎神（オキザカルカミ）	沖から遠ざかる神
	奥津那芸佐毘古神（オクツナギサヒコカミ）	沖の渚の神
	奥津甲斐弁羅神（オキツカミヘラカミ）	沖の渚の間を掌る神
右の腕輪（うでわ）（手袋）	辺疎神（ヘカザルカミ）	沖から遠ざかる神
	辺津那芸佐毘古神	沖の渚の神
	辺津甲斐弁羅神	沖の渚の間を掌る神

これらの神々は、動作や様相のその神威を持たせた感じで、厳密にはどのような意味を持つかは良く分かってはいない。ただ、禊ぎという行為に深く関わる神々には間違いないと思われる。

これ以後の神は、禊ぎを行った身体からも生まれた神々です。

躰の垢（あか）	八十禍津日神（ヤソマガツヒカミ）	災厄の神
	大禍津日神（オオマガツヒカミ）	
	神直毘神（カミナオビカミ）・大直毘神（オホナビカミ）・伊豆能神（イズノメカミ）	穢れを祓い禍（まが）を直す神
禊ぎをする水底から	底津綿津見神・底筒之男神	神生みの時に登場した神様と類似 ※綿津見三神とか住吉三神と言われ、海の神や航海安全や水難守護とされる神
禊ぎの水中から	中津綿津見神・中筒之男神	
禊ぎの水の表面から	上津綿津見神・上筒之男神	
左目から	天照大神（アマテラスオオカミ）	三貴神の一人で、太陽の神
右目から	月読命（ツクヨミノミコト）	三貴神の一人で、夜の神
鼻から	素箋嗚尊（スサノウノミコト）	三貴神の一人で、海の神

清めの塩の始まりについて

伊邪那岐命が禊ぎを行った時は、それが海水だったと言われ、それが起源で生れたのが「清めの塩」と言われている。その後民間で潮（塩）、垢離（しおごる）と呼ばれる海水を浴びる清めの作法や塩湯（えんとう）といった海水を沸かしたものを使用し、無病息災を願う信仰に繋がり、現在に継承されている。これは、死を穢れとする神道思想に基ずく土着信仰の表れで、仏教の中では「浄土真宗」を代表する一部宗派では、死に対す考え方が異なるため、「清めの塩」を使用しないケースもるので、事前に調べる必要がある。

誓約（うけい）の話

「伊邪那岐命」は、三貴神の誕生を大いに喜び、「天照大神」には天の世界（高天原）を、「月読神」には夜の世界を、「素箋鳴尊」には海の世界（葦原中国）を統治するように命じた。しかし「素盞鳴尊」は全く仕事をせず、ひたすら泣いているばかりで、その泣き声は山を枯れさせ、海を干上がらさせ、地上の世界はその禍いによってすっかり荒れ果ててしまった。それを気になった「伊邪那岐命」は「素箋鳴尊」にその理由をたずねると「母である伊邪那美命」に会いたくて、その母の居る世界に繋がる根の堅州国に行きたい」と言いました。

それを聞いた「伊邪那岐命」は大変怒り、「素箋鳴尊」を葦原中国から追い出してしまいました。

葦原中国から追放された「素箋鳴尊」は、根の堅州国に向かうことを決意しますが、その前に姉神である「天照大神」に挨拶をして行こうと高天原を訪れますが、乱暴者の「素箋鳴尊」が地上からやってくると聞いた「天照大神」は、「素箋鳴尊」が攻め込んできたものと勘違いして、弓矢を携え武装して「素箋鳴尊」を出迎えた。

それを見た「素箋鳴尊」は、自分はそのような狙いがあって姉神の所に来たのではないことを証明するために「誓約」をすることを提案します。ここでは、「天照大神」と「素箋鳴尊」の所有する物を交換し、そこから生まれ出た御子神の性別によって、自ら邪な気持ちのないことを証明すると提案された。先ず「素箋鳴尊」は、自ら所有する「十拳剣」を「天照大神」に手渡します。「天照大神」は、その剣を噛み砕き息を吹き出しと、その中から3柱の女神が生まれました。それが宗像三女です。

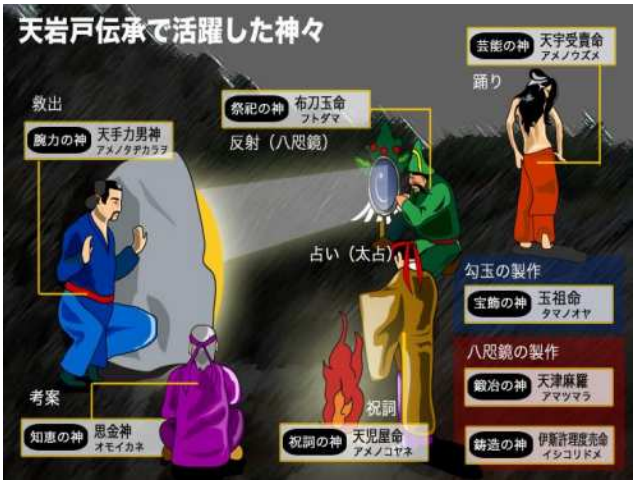
続いて「天照大神」は「素箋鳴尊」に、自身の身に着けていた「八尺の勾玉の五百箇のみすまるの珠」を手渡しました。受け取った「素箋鳴尊」も、これを噛み砕き息を吹き出すと、その中から5柱の男神が生まれました。

こうして「素箋鳴尊」は、自分の所有物である剣から心優しい女神が生まれたのは、自分に邪なことがなかったからであるとし、その身の潔白を伝え、「天照大神」はそれを了解する形で、ひとまず「素箋鳴尊」は高天原に迎えられることになった。「素箋鳴尊」の十拳剣から生れた神々は「海の女神」である「多紀理毘売命」（タキリビメミコト）「市寸島比売命」（イチキマヒメノミコト）「多岐都比売命」（タキツヒメノミコト）の宗像三女神です。

「天照大神」の「八尺野勾玉」から生れた神々は「天之忍穂耳命」（アメノオシホミミノミコト）「天穂日命」（アメノホヒノミコト）「天津彦根命」（アマツヒコネノミコト）「活津彦根命」（イクツヒコネミコト）「熊野櫲樟日命」（クマノクスビノコト）の五神で、太陽の御子と言われる。

天岩戸伝説について

なんとか高天原の地に入ることが許された「素箋鳴尊」は、その後乱暴狼藉の数々の悪事を働いてしまいます。例えば、「天照大神」の田んぼの畔や溝を破壊したり、神殿に糞をぶちまけたり、まさに好き勝手放題を働いた。それでも「天照大神」は、周囲の苦情をよそに「これには何かの考えがあってのこと」と、弟の愚業をかばい、深く諌めようとはしませんでした。しかし、ある時「素箋鳴尊」は馬の皮を剥ぎ、それを機織り小屋の屋根に穴を開け、そこに目掛けて馬を放り投げてしまいます。これに驚いた機織りの女は転げ落ちて、尖った器具を陰部に突き刺して死んでしまいます。さすがに「天照大神」は、堪忍袋の緒が切れて「天岩屋」に身を潜めてしまいました。すると高天原や中葦原国共々瞬く間に暗黒の闇に包まれてしまいました。その為、禍いが世界に蔓延し、困った八百万の神々は一同に集まって「思慮の神」である「思金神」（オモイカネノカミ）にどうすればいいのか、相談をしました。そして「思金神」は様々な儀式を提案し、その案にそって「天照大神」を外に出すように命じます。



天岩戸作戦の手順

① 常世の長鳴鳥（鶏）を集めて鳴かせた。
（夜が明けて鳥が鳴いているように見せた）

② 鍛冶の神「天津麻羅」（アマツマラ）を探し、鋼（ハガネ）を鋳造させた。

③ その鋼を元に「伊斯許理度売命」（イシコリドメノミコト）に八咫鏡（やたのかがみ）を造らせた。

④ 「玉祖命」（タマノオヤ）に命じて、八尺瓊勾玉（ヤサカニノマガタマ）を作らせた。

⑤ 「祝辞の神」の「天児屋命」（アメノコヤネノミコト）と「祭紀の神」の布刀玉命（フトダマノミコト）を呼び寄せた。

⑥ 両神に、雄鹿の肩の骨を抜き取り、ははかの木をとって占いをさせた。

⑦ 賢木（さかき）を根ごと掘り起こし、枝に八尺瓊勾玉と八咫鏡と布帛（ふはく）を掛けた。

⑧ それを「布刀玉命」が、御幣として奉げ持った。

⑨ 「天児屋命」が祝辞を唱え始めた。

⑩ 「腕力の神」の「天手力男神」（アメノタジカラヲカミ）が、岩戸の脇に隠れて待機した。

⑪ 「芸能の神」の「天宇受売命」（アメノウズメノミコト）が、胸をさらけ出し、裳の紐を陰部まで押下げて踊った。

⑫ 八百万の神々が一斉に笑い出した。

こうして、祝宴にも似たどんちゃん騒ぎを繰り広げると、岩戸の中に籠っていた「天照大神」は外の騒がしさに耳を立て、次第に外のことが気になり始めました。そこで「天照大神」は、天岩戸を少し開いて「自分が扉の中に籠っているのに、なぜ皆は楽しそうなのか」と尋ねます。すると、楽しそうに踊る「天宇受売命」は「あなた様より尊い神様が現われたので、それを祝っているのです」と答えた。そこで、「天児屋命」と「布刀玉命」は用意していた「八咫鏡」を掲げた。すると、鏡に写った自分を新たに現れた貴い神だと思い、もっと姿を見ようと岩戸から身を乗り出しました。すかさず岩戸の脇に隠れていた「天手力男神」が「天照大神」を外に引き出しました。そして「布刀玉命」が岩戸の前に進み出て。「注意縄」を張り、「もう中には入らないで下さい」と頼んだという。そして、再び「天照大神」が岩戸に隠れないように岩戸を蹴り飛ばし、それが遠く長野県の地まで飛んで行き、現在の戸隠山になったという。「天照大神」が天岩戸にお隠れになるきっかけを作った「素箋鳴尊」は髭と手足の爪を剥ぎ取られ、高天原から追放された。

八岐大蛇伝説について

高天原を追放された「素箋鳴尊」は、出雲国の肥河に降臨しました。すると目の前にとある老夫婦が、娘と一緒に泣いているのを目にしたので「どうしたのか」と尋ねました。この老夫婦は「足名椎命」（アシナヅチノミコト）と「手名椎命」（テナヅチノミコト）と言い、娘は「櫛名田比売」（クシナダヒメ）と言いました。老夫婦の話によると、この近くの船通山には、8つの頭と尾を持ち体にはコケや木が生え、腹はタダれて血を垂らした「八岐大蛇」という大蛇がいて、私たちには8柱の娘がいたのですが、毎年この大蛇に娘が食べられてしまい、今年もその時期が迫り、このままだと最後の娘である「櫛名田比売」も食べられてしまう」とのことでした。

これを聞いた「素箋鳴尊」は、老夫婦に自ら高天原から来た事を告げ、娘を妻に差し出すことを条件に、八岐大蛇の退治を引き受けることにしました。「素箋鳴尊」は、先ず8つの生垣を作り、老夫婦にその門ごとに強い酒の「八塩折之酒」を満たした桶を置くように指示をした。

そして「櫛名田比売」を隠すため、娘を櫛の姿に変えて自分の髪に押しました。そして八岐大蛇が来るのを待っていると、その大蛇が現われました。大蛇のそれぞれの頭は「素箋鳴尊」が仕掛けたとおりに、酒桶に頭を突っ込みガブガブと酒を飲み出しました。すっかり酒を飲み干すと、大蛇はそのまま酔っ払いその場に寝てしまいました。すると、これをチャンスと見た「素箋鳴尊」は、自ら十拳剣を引き抜き、大蛇に切り掛かり、無事に大蛇を征伐しました。そして、八岐大蛇の尾を切り刻んだ時に、なんと十拳剣の刃がかけてしいました。これを不思議に思い見てみると、そこには太刀が現われ、「素箋鳴尊」はこれを「天照大神」に献上することにした。

島根県松江市にある八重垣神社は、素箋鳴尊が八岐大蛇退治の時、櫛名田比売を佐久佐女の森（現境内、奥の院、鏡の池がある森）の大杉を中心に、八重垣を造って避難した池と言われている。また、その後暫く両神が夫婦生活を送った場所と伝えられている。その後、両神が夫婦生活を送った地としては、「須我神社」が有名です。

稲葉の素兎のはなし

世代は変わって、「素箋鳴尊」より6代子孫となる「大国主命」の話です。「大国主命」と名乗るのはもっと先の話ですが、「大国主命」が「大己貴命」（オホナムチノミコト）と呼ばれていた頃の話です。

当時「大己貴命」には、八十神（ヤソカミ）と呼ばれるほど多くの兄弟がおりました。八十神たちは稲羽（因幡）にいるという「八上比売」（ヤガミヒメ）に求婚するという事で、「大己貴命」を含む一行は八上へと向かいました。当時、八十神たちは「大己貴命」をのけ者にし、手持ちの荷物をすべて「大己貴命」に預けて、そそくさと先に行ってしまいました。先に「気多の岬」に辿り着いた八十神たちは、途中で皮を剥がれた丸裸の素兎が倒れているのを見つけました。八十神たちは、この兎をからかってやろうと「海水を浴びて山に伏し、風を浴びればキズなどは癒えてしまうよ」などとデマカセを言い放ち、一行は先を急ぎました。兎はその話を信じて実際に言われた通りにすると、キズは治るどころか体中の皮膚が裂け、激しい痛みに襲われました。その兎は余りの激痛に、シクシクと泣いていると、大きな荷物を背負った「大己貴命」が遅れて通りかかりました。そして泣いている兎を見てその訳を訪ねました。

元々この兎は、隠岐の島に住んでいたが、海を渡ろうと思った時にその方法がなかったので、海にいるワニに「兎の一族とワニの一族のどちらが数多いか勝負しないか」と話を持ち掛けました。

※この時のワニとは、当然日本海にいないことからサメではないかと言われていますが、最近の研究では2千万年前の話ですが、隠岐の島では東アジア最古の巨大ワニの化石が発見されており、全くのデマでもないと思い興味深い話でもあります・

とにかく兎は、ワニに数を数えるから一列に並ぶように指示を出した。するとワニは、分かったと言い、一列に並び始めました。

兎は、シメシメと数を数えるフリをしながら、ワニの背中を使ってなんなく海を渡り始めました。そして、出雲の海岸付近まで渡り切ろうとした矢先に、兎は調子にのって思わず自分の企んでいた企みを暴露してしまいます。これに怒ったワニは、兎の毛皮を剥ぎ取ってしまいました。このように、兎はこのことの顛末を「大己貴命」に答えました。これを聞いて、かわいそうに思った「大己貴命」は、兎に「先ず河口に行って真水で体を洗い、そこに生えているガマの花粉を敷いた上で横たわっていれば、傷は良くなるだろう」と教えました。そして、兎はその「大己貴命」の言う通りにすると、傷はたちまち癒えてしまいました。喜んだ兎は「大己貴命」に「八上比売は、夫に八十神ではなくあなたを選ぶでしょう」と言いました。そして、兎の予告通り八上比売は「国己貴命」を結婚相手として選びました。しかし、この出来事によって「国己貴命」は八十神々から怒りを買うことになり、この後に数々の危機に見舞われることになるのです。

参考資料

大国主命は、縁結びの神様として有名ですが医療の神様としても非常に有名です。その言われの原点が、この素兎に対する治療の的確なアドバイスにあると言われている。

その為、大国主命（大己貴命）が祀られている神社では、病気平癒や医療関係の御神徳が高い。

八十神々の陰謀のはなし

「大己貴命」が、「八上比売」のハートを射止めたことがどうしても気に入らない八十神々は、「大己貴命」を殺す計画を立てます。そして「大己貴命」を伯岐国（現在の鳥取県西部）の手間の山に誘い出し「赤い猪がこの山にいるので、我々が一斉に追いおろすから、お前は待ち受けてそれを捕えろ」と命令した。

そして「大己貴命」は、麓で待ち構えていると、八十神たちは猪に似た大石を火で焼いて、山の上から転がし落としました。哀れ「大己貴命」は律儀に大岩を正面から受け止め、そのまま石に焼かれて死んでしまいました。

八十神たちの策略はうまくいき、八十神たちは「大己貴命」の遺体を持ち帰り、母神の元へ帰って行きました。

「大己貴命」の母神である刺国若比売（サシクニワカヒメ）は、御子神の「大己貴命」の死を深く嘆き悲しみ、高天原の「神産巣日神」（カミムスビカミ）に助けを求めました。すると、「神産巣日神」は「赤貝の精霊」となる「蚶貝比売（キサカヒヒメ）蛤の精霊となる「蛤貝比売（ウムギヒメ）という2柱の女神を遣わしました。そして、先ず「蛤貝比売」 が貝殻で「大己貴命」の体を岩から剥がし、続いて蚶貝比売が貝殻を削った粉を清水で母乳のようにして練って塗ったところ、「大己貴命」は無事に生き返ることが出来ました。

「大己貴命」は無事再生を図るものの、八十神々の殺害計画は執拗に続きます。今度は、大木を切り倒してクサビで割れ目を作り、その中に「大己貴命」を入らせクサビを引き抜いて打ち殺してしまった。母神の「刺国若比売」は、泣きながら「大己貴命」を探したところ、その大木を見つけることができ、すぐさま木を裂いて取り出して、再び「大己貴命」を生き返らせました。そして、このままでは「大己貴命」の命が何度あっても持たないと思い、木国の「大屋毘比古神」（オオヤヒコカミ）の所へ逃げるように命じた。

ところが、八十神々は木国まで追いかけて来て「大己貴命」を出せと執拗に迫ります。「大屋毘古神」は大己貴命」の身を案じ、木の虚（うろ）から「根の堅州国」へと逃がしました。これにより何とか「大己貴命」は八十神々の手から無事に逃げることが出来ました。因にこちら「大己貴命」は「五十猛神」（イソタケルカミ）の別名と言われており、「林業の神」として有名で、「紀伊」の語源は、この木国からきている。そして「大己貴命」が逃げ込んだ「根の堅州国」では、「素箋鳴尊」がその国の王となっていた。

根の堅州国の試練のはなし

執拗な八十神々の追撃を退け、何とか「根の堅州国」へと逃げ込んだ「大己貴命」は、「素箋鳴尊」の家にまで来ました。「素箋鳴尊」は、以前より母恋しさに根の堅州国へ行くことを所望し続けて、初志貫徹し願い叶って根の堅州国にやって来て、無事に母神である伊邪那美神に会うことが出来、巡り巡って根の堅州国の王となっていたのです。その6代末裔にあたる「大己貴命」が「素箋鳴尊」の元に訪れたのでした。そこで「大己貴命」は「素箋鳴尊」の娘である「素勢理毘売り命」（スセリビメノミコト）と出会います。両神は見つめ合うやいなや心が通じ合い「須勢理毘売命」は「大己貴命」に一目ぼれしてしまいました。そして「須勢理毘売命」は「素箋鳴尊」に「とても立派な神が現われました」と言って「大己貴命」を紹介し、「まさに「葦原色許男神」（アシハラシコヲカミ）つまり、日本の屈強な男だ」と称えました。そこで「素箋鳴尊」は「大己貴命」に幾つかの試練を与えて試すことにした。

試練その１

先ず、「大己貴命」を蛇がたむろする室屋に寝るように命じる。すると、「須勢理毘売命」がどこかともなく現われ「のヒレ」を授け、「蛇に襲われるような事があれば、このヒレを三度振るように教えた。言われた通りした「国己貴命」蛇に襲われることなく、無事に一晩を過ごす事が出来たという。

試練その２

今度は、「大己貴命」をムカデやハチがうごめく室屋に眠るように命じました。すると、再び現れた「須勢理毘売命」は昨晩と同じく、今度は「ムカデと蜂のヒレ」を授け、同じようにして「大己貴命」は問題なくその夜も過ごす事ができたという。

試練その３

「素箋鳴尊」は今度こそ言わんばかりに、鳴鏑（なきかぶら）（射ると大きな音響を発して飛ぶ矢）を広い野原に射込み、その矢を拾って来るように「大己貴命」に命じました。そして「大己貴命」が草原に入ると草原に火を放ち「大己貴命」は途端に炎に囲まれてしまいました。すると、今度は鼠が現われて「内はほらほら、外はすぶすぶ」と告げました。その意味を理解した「大己貴命」は、その場で思い切り足を踏み込むと底が抜けて地中から穴が出て来ました。そこでその穴に身を隠し、炎が通り過ぎるのを待つと、「大己貴命」は無事に事なきを得たのでした。しかも鼠は、「素箋鳴尊」の放った鳴鏑まで持って来てくれたので、この第３の試練も何とか切り抜けることが出来ました。そして、さすがに今回の試練は無理だろうと諦めて、葬式の準備をしていた「須勢理毘比売命」の元に無事帰り着くことが出来たのです。

第４の試練

続いて「素箋鳴尊」は、自分の頭のシラミを取るように命じました。しかし、その頭からはムカデが這い回って、気持ちが悪くてなかなか取れません。すると、すかさず「須勢理毘比売神」は「椋（むく）の実」と赤土を「大己貴命」に授けました。そして「大己貴命」はその実を噛み砕き、赤土を口に含んでそれを吐き出すと、まるで

「大己貴命」がそのムカデを噛み潰しているかのように見え、これを勘違いした「素箋嗚尊」は「かわいい奴だ」と思い込んで寝入ってしまいます。これをチャンスと感じた両神は、「素箋嗚尊」を柱に縛り付け、大きな石で部屋の入口を塞ぎ、そのまま逃げ出しました。しかしこの時「素箋嗚尊」の生太刀と生弓をくすね、「須勢理毘売神」の琴を持ち逃げた為、琴が木に触れて大きな音が鳴り響いてしまいます。これに気付いた「素箋嗚尊」は、はっと目覚めましたが、追いかけようにも身動きが取れず、体制を整えている隙に両神は遠くまで逃げ去ってしまいました。そして、後を追った「素箋嗚尊」は、黄泉津比良坂まで追いかけたのを最後に追跡を断念し、遠くに逃げる両神にこう告げるのでした。「お前が持っている生大刀と生弓で従わない八十神々を追い払え、そしてお前が大国主となって「須勢理毘売命」を妻として立派な宮殿を建てて住め、この野郎め」こうして「大己貴命」は試練をクリアし、地上界に戻って行ったという。

地上界に戻った「大己貴命」は「大国主命」となり、散々自身を苦しめた八十神々たちを、奪い取った生大刀と生弓で成敗し、これを建国の足掛かりとして国造りに着手することになった。

雑談

大国主命には呼び名が多くあります。代表的なものをあげると「大己貴命」・「葦原色許男神」・「八千矛命」「大汝命」などでその他にも「大物主神」や大国魂大神などの名もある。

その中で「八千矛神」（ヤチホコノカミ）の全国各地に残る恋愛談を残しています。「大国主命」はとにかく恋多き神様としても有名で、これもご縁に強い神様ならではと思います。

「八千矛神」は、最初に認められた女神としては「八上比売」がおりましたが、「八千矛命」が「根の堅州国」へ行っていたこともあり「八上比売」は「八千矛神」会えない日々が続いていた。しかも既にお腹には子を宿しており、「八上比売」は出産を待つばかりの状態でした。そんな時「八千矛神」は、「根の堅州国」から無事脱出して来ます。そして、出雲の国に帰るにあたって、今までの生産活動に入るのです。そこで、最初に妻として向かえ入れることを約束した「八上比売」を呼び寄せ、結婚をしました。続いて、共に「根の堅州国」から脱出してきた「須勢理毘比売神」を正妻として迎い入れます。しかし、出雲へと戻る途中も「八上比売」は「須勢理毘比売神」のことが気にかかり、更に「須勢理毘比売神」が非常に嫉妬深い性質であることから、それに恐れを抱き、ついに身ごもりながらもその途中で子を出産し、逃げるように国元に帰ってしまうのでした。そして、この時生まれた子が、「八千矛神」の第一子となる「木俣大神」（コノマタノオオカミ）となります。

そんな一悶着のあった「八千矛神」ですが、そのまま「須勢理毘比売神」一筋で行くかと思えば、「八千矛神」の恋愛劇はここからがスタートとなったという。

出雲の国づくりのはなし

ようやく「大国主命」の国造りに入ります。そして、そんな時にこそ出会いが突然の始まります。それは「大国主命」が出雲の美保の岬にいた時に、海の彼方から「天の羅摩船」（あめのかがみふね）に乗って、蛾の衣を着た小人神が突如として現れました。そこで「大国主命」は彼の名を訪ねましたが返事がありません。誰だろうと思っていると、そこにヒキガエルの「多邇具久」（タニグク）が現われて「これは山田の案山子の神「久延毘古」に聞けば分かります」と答えた。そこで改めて「久延毘古」の元を訪れ、彼の名を訪ねると「その小人神は「神産巣日神」（ケミムスヒカミ）の御子様であります「小名毘古那神」（スクナビコナカミ）のことでしょう」と答えました。

そこで、実際に「神産巣日神」の元を訪れ、その事実を確認した処、間違いない「少名毘古那神」は、「神産巣日神」の指の隙間から落ちてしまった子だという事が判明したという。そして「大国主命」は、「神産巣日神」と「少名毘古那神」と共に国造りを続けるように命じました。こうして「大国主命」と「少名毘古那神」は兄弟となり国造りに励みました。この「少名毘古那神」の親となる「神産巣日神」ですが、日本書紀では設定が異なり「高皇産霊尊」（タカミヌスビノミコト）の子となっている。この両神の国造りの様子は日本書紀や風土記にその活躍が記録されています。

日本書紀では、両神は人々や家畜の為に「病を治療する方法」を授け、農耕における「害虫駆除を可能としたまじない」を教えており、生活の基盤としての医療と農耕の技術革新を招いたという。

更に、風土記でも両神は「人間たちが早く亡くなってしまいことを哀れみ、「温泉の術」（ゆあみのちえ）を定め多と言い、これが「箱根の元湯となった」とも伝えられる。愛媛県の松山付近でも病気治療のために「大分の早見の湯」から湯を引き、快癒したことが「道後温泉」に始まるなど、両神は多くの恩恵をもたらした。

こうして両神は、医療・医薬・酒造・農業・温泉・占いなどに関わる事業に強い御神徳を発揮したと考えられる。

大物主神との出会いのはなし

世の中には、出会いもあれば別れもあります。「少名毘古那神」は国造り半ばにして突如「自分の役割は終わった」として、栗の茎にぼりその弾力を使って常世に帰って行ってしまいました。これに大変ショックを受けた「大国主命」は、これからどうして良いか悩んでいると、海の向こうから海面を照らしながらやって来る一つの神が現われました。

その神は「大物主神」（オオモノヌシノカミ）と言い、「大国主命」に対して「私は「幸魂奇魂」（さちみたまくしみたま）である。私を祀れば一緒に国造りをしましょう」と言いました。

そこで「どう祀ればよいのか」と尋ねると「大和国の東の山の頂きに祀りなさい」と言われ、「大国主命」は早速言われた通り「大物主神」を大和の御諸山（みもろやま）現在の奈良県の三輪山に祀りました。
そして、今度はこの両神による国造りが行われ、ついに最後まで成し遂げることが出来たという。

※ちなみに、この「大物主神」は「大国主命」本人ではないかという事も出来るのではないかという説もある。
一般的にも、「大国主命」は火土地の人格において「和魂」（にきみたま）、いわゆる一つの人格における安らぎの面と言われており、この反対に性格の荒々しい部分の「荒魂」（あらだま）の部分を持った人格でもある。
そのように考えると、強力なパートナーを失った「大国主命」は、絶望から舞い戻るために自らの半身を別人化することによって、目的を達成したと思われる。

※奈良県桜井市三輪にある「大神神社」は、「大物主神」をご神体として祀られており、これはある意見、神を祀る行為が最も早く行われた瞬間であり、出雲大社も国譲りの後からで、誰かを祀るための施設としてここは初めてではないかと思われる。この大神神社が日本最古の神社とする説もある。

出雲の国譲りのはなし（前編）

「大国主命」は国つくりを達成し、葦原中国は大層栄え賑わっていました。しかし、これを見ていた「天照大神」を始めとした高天原の神々は「この地上を治めるべきは、我が一族」と言い始め、天の神々を地上に派遣することに気目ました。
そして最初に派遣されたのが誓約によって生まれた「天照大神」の御子神「天忍穂耳命」（アメノオホシホミミノミコト）でした。しかし「天忍穂耳命」は地上界へと降りる天の浮橋から下界を覗くと、その騒がしさに嫌気がさして、そのまま地上に降り立つことなく引き返してしまった。
すると「天照大神」は、八百万の神々と天の岩戸事件の時に活躍した知恵の神「思金神」に相談し、第二の刺客として同じく誓約で生まれた「天穂日命」（アメノホヒノミコト）を地上に派遣することにしたが、「天穂日命」

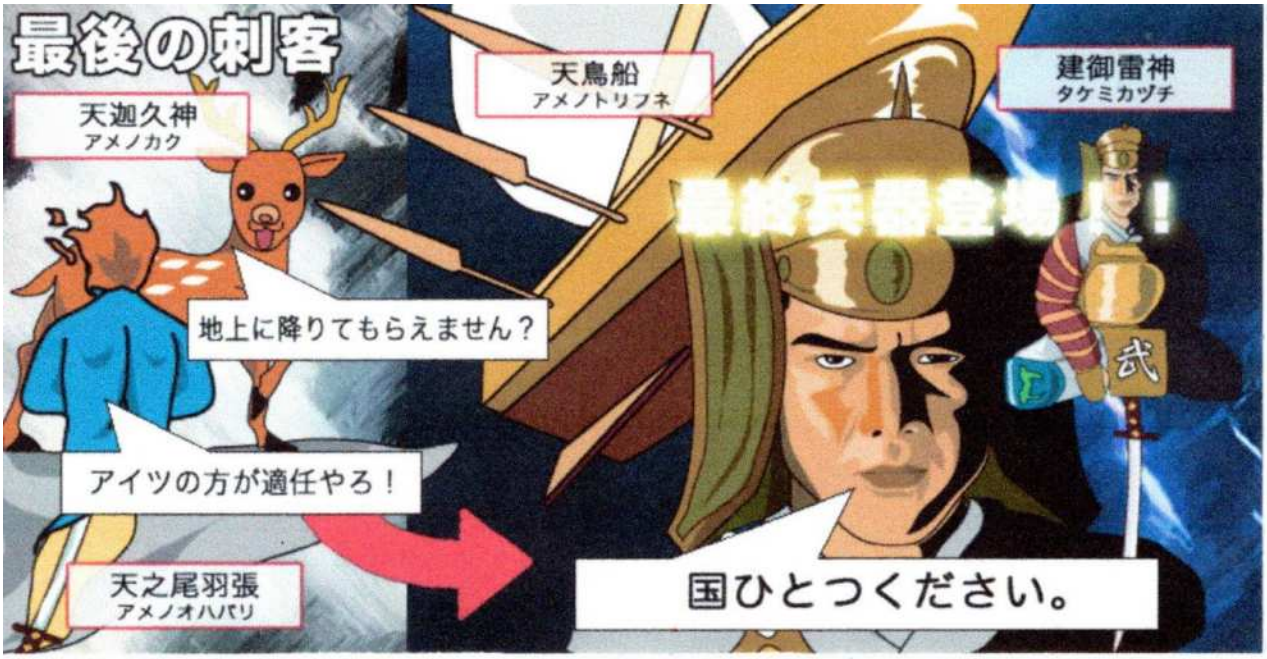
は、地上に降り立つやいなやすっかり「大国主命」になびいてしまい、そのまま「大国主命」の家来になってしまった。その後、3年経過したが「天穂日命」は高天原に戻る様子もなく、これも失敗した。
再度「天照大神」は、八百万の神々と「思金神」と相談し、今度こそはと「天若日子」（アメノワカヒコ）を第三の刺客としと選び、「天之麻古弓」（あめのまかこゆみ）と「天之波波矢」（あめのははや）という弓矢一式を与えられ、地上界に派遣されることになったが、これが後の不幸を招くことになります。
地上界に降り立った「天之若人」は、なんとそのまま「大国主命」の娘である「下照姫」と結婚してしまい、逆に自分自身が葦原中国の王になると言い出し、そのまま帰ってこなかったと言います。
そして時が過ぎ、全く連絡をよこしてこない「天之若人」にしびれを切らした「天照大神」を始めとした八百万の神々は、再び会議を開き「思金神」のの発案で「雉」（きじし）の鳴女（なきめ）を送り込むことにした。
鳴女はキジの姿をした神で、「天之若人」に葦原中国平定を厳命したのに、なぜ何の連絡もよこさないのか確認して来るように依頼しました。「鳴女」は「天之若人」の家の木に止まると、「天之若人」にその任務を思い起させるために鳴き始めました。するとそこにいた「天佐具売」（アメノサグメ）は「この鳥の鳴き声は不吉だから殺した方がいい」と「天之若人」をそそのかしてしまいます。すると「天之若人」はそのまま「高御産巣日神」から受け取った弓矢で、鳴女を射抜いて殺してしまいました。そして、そのまま矢は高天原の「高御産巣日神」の所まで飛んで行きました。これを受け取った「高御産巣日神」は、その矢に血がついていることを確認し、その矢を「もし、天之若人」に邪の考えがあるのであれば、この矢は「天之若人」を射抜くであろう」と言って、その矢を下界に投げ返しました。矢は見事「天之若人」の胸を射抜き、結局最後に居合わせた鳴女ともども誰も高天原に戻ってきませんでした。

こうして葦原中国を治めるために遣わされた数々の神は、ことごとく失敗を繰り返し、最後に派遣された「天之若人」に至っては、命まで失われる結果となってしまった。
地上では「天之若人」の妻「下照姫」が、夫の死を深く嘆きその泣き声は天にまで届き、「天之若人」の父神の「天津国玉神」（アマツクニタマカミ）を突き動かし、地上に降り立って「天之若人」の葬儀のために喪屋を建てました。そして、盛大な弔いが行われ「下照姫」の兄「阿遅志貴高日子根神」（アジシキタカヒコネカミ）のその弔いに参列したという。しかし、この「阿遅志貴高日子根神」の容姿は「天之若人」に瓜二つと言われ、「阿

遅志貴高日子根神」が現われると「天之若人」の親神たちは、本人が生き返ったと思い込み、そのまま「阿遅志貴高日子根神」に抱き着いてしまいました。すると同一視されたことに腹を立てた「阿遅志貴高日子根神」は怒り狂い、そのまま剣を抜いて喪屋を切り倒し、蹴り飛ばしてしまいました。その喪屋が、そのまま美濃国の喪山となったと言われる。

出雲の国譲りのはなし（後編）

再三失敗を繰り返して来た高天原の神々も、今度は最後の手段として非常に力のある神を派遣することを考えた。そして「思金神」が提案して「迦具土神」を切り殺した刀「十拳剣」（とかのつるぎ）の化身「天之尾羽張」（アメノオハバリ）か、その刀から生まれた御子神となる「建御雷神」（アメノカヅチカミ）が適任という案が出された.しかし「天之尾羽張」は、天安河（やすのかわら）の水を堰き上げて、道を塞いでいたことから他の神が容易に近づくことが出来ず、そのため鹿の神の化身たる「天迦久神」（アメノカク）が遣わされ「天之尾羽張」に確認すると、それならば「建御雷神」の方が適任という答えた為「建御雷神」が葦原中国に遣わされることに決まりました。そして「建御雷神」は「天鳥船」（アメノトリフネ）と共に、十拳剣を抜いてそれを逆さまに立てた剣先の上にあぐらをかくという異様な出で立ちで、出雲国の伊奈佐の小浜に降臨した。そして既に隠居の身あった「大国主命」に「この国は、御子が治めるべきと『天照大神』仰せである。そなたはどうお考えか」と尋ねると、「大国主命」は「自分が答える前に、息子である『事代主神』（トシコロヌシノカミ）に聞いてくれ」とお茶を濁したという。すると「建御雷神」と降臨を果たした「天鳥船」は、事代主神」が美保ケ埼で漁をしているという情報をキャッチし、あっという間にひとっ飛びし、事代主神を連れて来ました。そして事代主神は、国譲りを訪ねられると「仰せの通りに」と言い放ちそのまま船を踏み傾け、逆手を打って青柴垣に化え、その中に隠れてしまいました。



「建御雷神」は「他に意見のある御子はいないか」と尋ねると、「大国主命」は別の息子の「建御名方神」（タケミナカタノカミ）にも聞くように言いました。しばらくすると「建御名方神」が現われ、力自慢の「建御名方神」は当然のことから、国を渡すことに反対し、力比べを申し出ました。そして「建御名方神」が「建御雷神」の腕を掴むと、「建御雷神」は、そのまま腕を「つらら」から「剣」に変化させ、掴んだ腕を振りほどきました。そして、今度は「建御雷神」が「建御名方神」の腕を掴み、まるで葦の若菜を摘むように、腕を握りつぶしながら易々と投

げ飛ばしました。あまりの力の違いに恐れおののいた「建御名方神」はその場を逃げますが、後を追う建御雷神」にとうとう科野国（しなのこく）の州羽の海（諏訪湖）まで追い詰められてしまいました。
「建御名方神」は、この諏訪の地から出ないことを約束し、その場で降参をしました。

出雲大社の登場

こうして「大国主命」の御子達をことごとく屈服させた「建御雷神」は再び、「大國主命」の元を訪れ、国を譲るかどうかを訪ねました。すると「大国主命」は「二人の息子が天津神に従うと言うのであれば、私もそれに従います。それに代わり、私の住む場所として天の御子が住むのと同じくらい高くそびえる宮殿を建てて頂きたい。そうしてもらえるのであれば、私もおとなしくそこに籠り、私の百八十の神々も「事代主神」の選択に従って天津神に背くことはないだろう」と。こうして、天照大神の国譲り交渉は幕を閉じました。

「大国主命」は、出雲国の多芸志（たぎし）の小濱に巨大な宮殿を建てて、服従の証として多くの料理で「建御雷神」をもてなしたという。そして、改めて服従の誓いの言葉を唱えられたとされ、その誓いの言葉が「火霧詞」と呼ばれるもので、現在も「神魂神社」（かもすじんじゃ）に代々伝えられ、神事の中も唱えられています。その後「建御雷神」は高天原に」帰り、葦原中国を平定したことを無事に報告したという。国譲りは、日本書紀の場合「建御雷神」と降臨する神は「経津主神」となっている所が、設定と違う。

天孫降臨のはなし

武御雷神（タケミカズツノカミ））による国譲りが完了した葦原中国が、いよいよ高天原の神々いわゆる天津神による地上の実効支配を迎える。その先方として「瓊瓊杵尊」（ニニギノミコト）が送り込まれます。「瓊瓊杵尊」は、皇祖人として最高位となる「天照大神」の孫にあたることから「天孫降臨」と呼ばれる。
しかし当初は、その父神である「天忍穂耳命」（アメノオシホノミコト）にその命が下るのですが、その時「瓊瓊杵命」が生まれたことを理由に、その役目を譲り「瓊瓊杵命」にその役割が回ってしまった。「天忍穂耳命」と言えば、国譲りの時に最初に命を受けながら、直ぐに引き返して来た神であり、ここでもその役割を回避したという点では、あま

り乗り気でなかったと思われる。そこで、「瓊瓊杵命」は複数の神々を伴い葦原中国の統治者として地上に降り立つことになりました、そして、その時「天照大神」は三種の神器となる「八尺の勾玉と八咫の鏡・草薙剣」を授け、鏡を自分だと思い、地上でも祀るように命じたという。

こうして天孫降臨に望む「瓊瓊杵尊」ですが、この時に同伴する神々は選りすぐりの者達でした。

同伴に選ばれた五部神

・天児屋根命（アメノコヤネノミコト）　―天岩戸伝承で、祝辞を奏上した祝辞の神
・布刀玉命（フトダマノミコト）　―天戸伝承で鏡を掲げた祭祀の神
・天宇受売命（アメノウズメノミコト）　―天岩戸伝承で踊りを披露した芸能の女神
・伊斯許理度売命（イシコリドメノミコト）―天岩戸伝承で八咫の鏡を製作した神
・玉祖命（タマノオヤノミコト）　―天岩戸伝承で八尺瓊勾玉を製作した神

三種の神器の警備役としての神々

・天手力男神（アメノテジカラノカミ）　―天岩戸伝承で岩戸を蹴散らし、「天照大神」を救出した腕力の神
・思金神（オモイカネノカミ）　―天岩戸伝承他、あらゆる軍議で助言を呈してきた知恵の神
・天石門別神（アマノイハトワクノカミ）―天岩戸の管理をしていた門番を司る神

猿田彦命の道案内

こうして一行は、高天原より葦原中国へと向かいますが、天と地の分かれ道である「天の八衢（やちまた）に差し掛かった時、一行は前方から天上国と葦原中国を照らすほどの大いなる光に包まれました。この怪しげな高天原まで届きました。

「天照大神」と「高皇産霊神」（タカミムスビノカミ）は、「手弱女だが、顔を合わせても気後れしない」との理由で「天宇受売命」に、この先の光の主を探すように命じます。そして「天宇受売命」はその光の元に出向き、其の名を訪ねると「我が名は「猿田彦命」（サルタヒコノミコト）。天津神の御子が降臨されると聞き、その道案内をしようと馳せ参じました」と言った。その時の「猿田彦神」の姿は異様なものであり、猿とも天狗ともつかない人離れした姿をしていたと言われる。具体的には、鼻の長さは七咫（約120cm）、背丈が七尺（210cm）、口と尻からは明るく光り、目は八咫の鏡の如く丸く赤く輝いていたと、まさに異形の姿をしていたと言われる。

こうして無事準備も整い、一行は「筑紫の日向の高千穂の櫛触岳」という地に降り立つことが出来たという。こうの降臨の地は、宮崎の高千穂には峰が二つあり、その特定は今も特定出来ていないことから謎となっている。一方、「猿田彦命」は故郷である伊勢国の阿邪訶（現在の松坂市）に舞い戻り、普段の生活に戻っていました。そして、ある日、海で漁をしていたところ、比良夫貝に手を挟まれ、そのままおぼれて死んでしまったという。ちなみに、「猿田彦命」は道案内の実績から「道祖神」と史て、広く信仰されています。

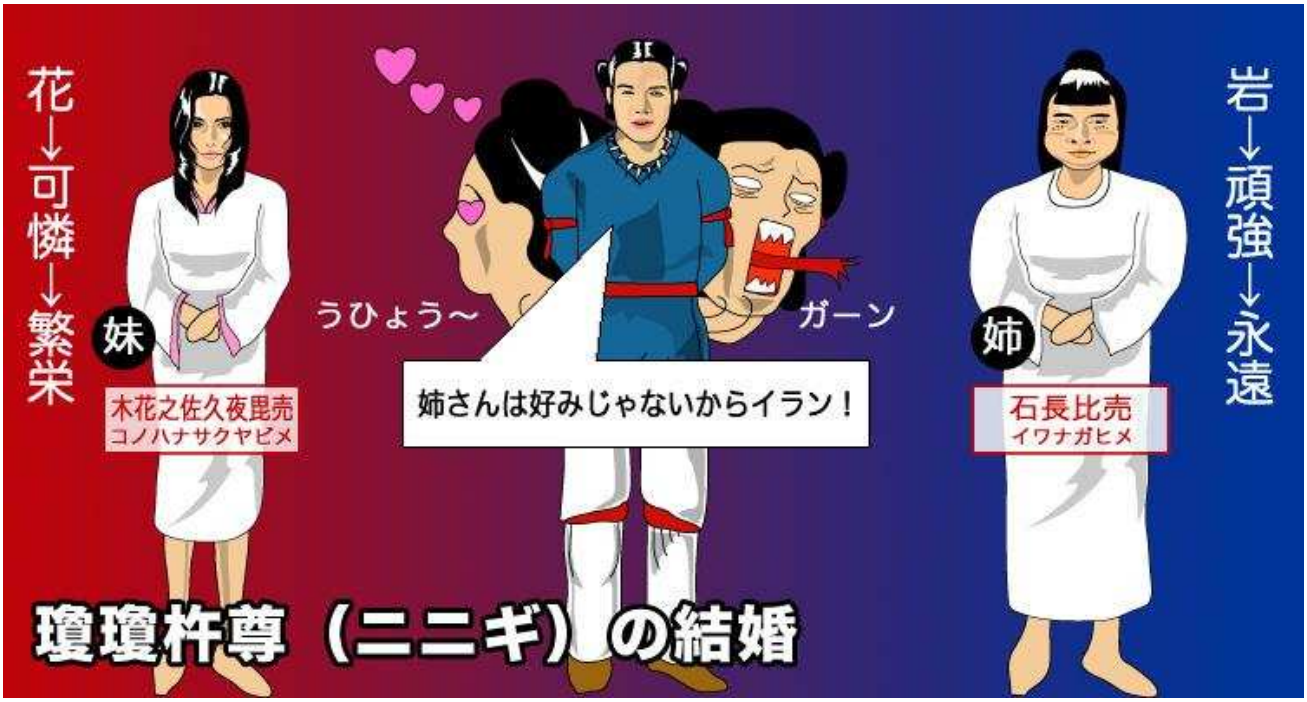
また、残された「天宇受売命」ですが、本来妖艶な姿と振舞いから芸能

の女神としての側面を強く印象付けられていますが、意外と気の強い女神でそのエピソードとして、「猿田彦命」を送り届けた後伊勢湾に出た際、海に住むすべての生き物を呼び集め、神の御子に仕えるかどうかを訪ねました。すると皆「お仕えします」と答えるのですが、ナマコだけは沈黙しておりました。すると「天宇受売命」は「何も答えることが出来ないロはこうしてくれる」と言って、懐から短剣を取り出してナマコのロを切り裂いてしまいました。そしてこれがナマコのロが横に裂けている由縁となっているようで、「天宇受売命」の気性の荒さを示すエピソードが残っています。

瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）の結婚のはなし

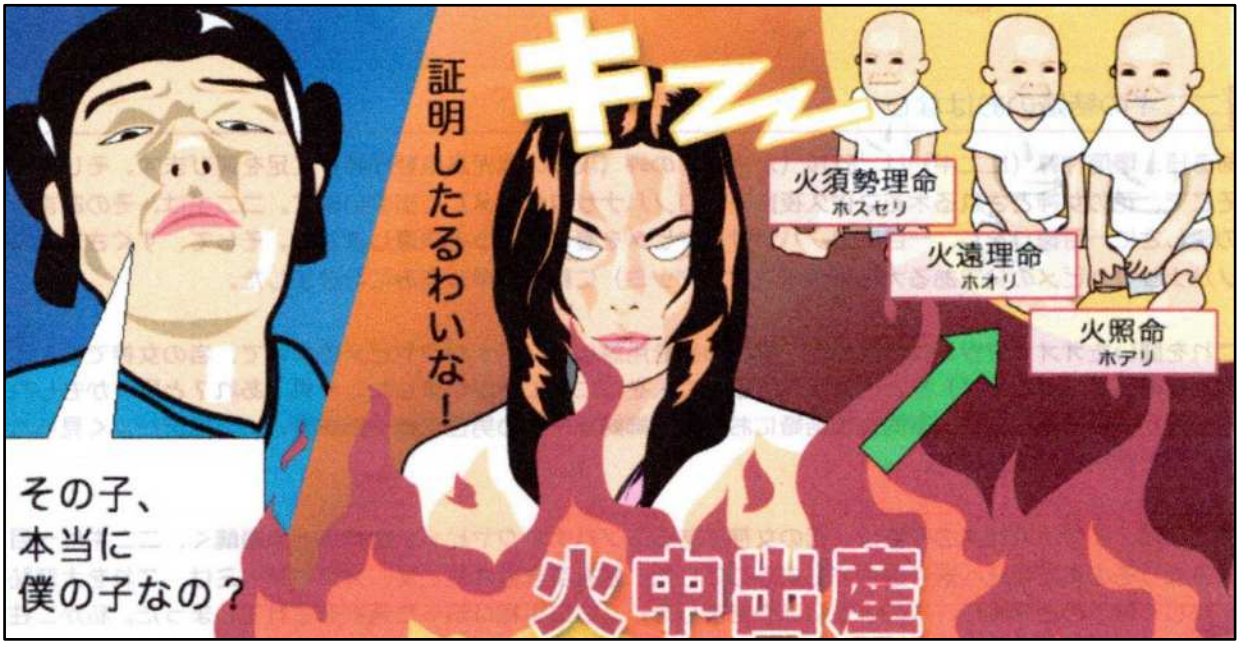
ある日「瓊瓊杵尊」は、笠沙の岬（現在の鹿児島県野間岬）に足を運びました。そして、そこで花の女神とされている「木花之佐久夜毘売（コノサクヤビメ）に出会います。「瓊瓊杵尊」はそのあまりの美しさに一目ぼれをし、妻にしようと決意しました。そしてすぐさま「木花之佐久夜毘売」の父である「大山祇神」（オオヤマツミノカミ）に結婚の申込をしました。これを聞いた「大山祇神」は、大変喜び、祝いの品を用意し「木花之佐久夜毘売」の姉神で、岩の女神でもある「石長比売」（イワナガニメ）を共に差出し、「瓊瓊杵尊」に嫁がせました。一見「あれ？」と思うかもしれませんが、当寺としては家同士の結婚において姉妹が一人の男性に嫁ぐ「姉妹婚」という風習が良く見られていたと思われます。ところが「石長比売」の容姿は大層醜く、「瓊瓊杵尊」一目見るなりそのまま親元に送り返してしまうのでした。娘を突き返された「大山祇神」はこれを大変恥ずかしく思うのと同時に、次のようにぼやきました。「瓊瓊杵尊」は誤った選択をされてしまった。私が二柱の娘を送ったのは、石が頑強であるように永遠の長きにわたって、花のように栄えるという誓約を建てたからであったのに、石の神である姉神を送り返したことで、永遠性が失われてしまった」と。この時「瓊瓊杵尊」が下した判断によって、神の命における永遠性が失われ、それから代々に渡って神の御子に寿命が与えられることになってしまったという。

結婚をして暫くすると「木花之佐久夜毘売」は、自身が子供を身籠り出産が間近に迫っていることを「瓊瓊杵尊」に伝えにやって来ました。ところが「瓊瓊杵尊」はその出産を喜ぶどころか、一夜限りの契りで身籠ったことが信じられず、それは他の神の子ではないかと疑いました。その言葉に絶句した「木花之佐久夜毘売」は、



「あなたの子であれば無事に生まれてくるでしょう」と不穏な言葉を残し、その場を後にしました。そして出産当日「木花之佐久夜毘売」は産屋に立てこもると、内側から壁を土で塗り固め、出口を塞いで、そのまま建物に火を放ちました。そして燃え盛る炎も中「木花之佐久夜毘売」は無事に出産を成し遂げました。この苦痛の中で無事に産み落とした子は、まさに神の子であると、自らの体を張って証明したのです。こうして生まれたのが「火照命」（ホデリノミコト）、「火須勢理命」（ホシセリノミコト）、「火遠理命」（ホオリノミコト）の3柱の神々となりました。

海幸彦と山幸彦のはなし



「瓊瓊杵尊」と「木花之佐久夜毘売」との間には長男の「火照命」と二男「火須勢理命」三男の「遠理命」という山兄弟が生まれました。ただ二男にあたる「火須勢理命」は、誕生の時だけ登場するが、その後は出て来ません。兄の「火照命」は釣り道具を使って海の幸を獲り、弟の「遠理命」は弓矢を使って山の幸を狩って生活をしていました。このことから、兄は「海幸彦」弟は「山幸彦と呼ばれていた。

ある日のこと、弟「遠理命」は兄の「火照命」にたまにはお互いの道具を交換しないかと提案します。兄の「火照命」は余り乗り気ではなかったのですが、弟が執拗にせがむので渋々交換をしました。弟「遠理命」は早速、兄から譲り受けた釣り針をもって海に行きます。

然し慣れない「遠理命」は、魚を釣るどころか、借りた釣り針を海でなくしてしまいます。針をなくし途方に暮れていたところに、兄の「火照命」が現われました。兄も慣れない道具では獣を狩ることが出来ず、そろそろ元に戻そうと言いました。しかし弟の「遠理命」には釣り針があり

ません。その為弟「遠理命」は正直に釣り針をなくしたことをつたえましたが、兄「火照命」は許そうとせず、ひたすら釣り針を帰すように迫りました。そうは言っても広大な海のなかで、小さな釣り針一つを探し出すのは容易なことではありません。
その為、弟「遠理命」は自分の剣（十拳剣）を千本もの釣り針に変えて兄に返そうとしましたが、「自分の釣り針がいい」と申し出を頑なに拒みました。釣り針をなくし悲観にくれる弟「遠理命」は、海辺で何も出来ずにただひたすら鳴いていました。すると潮流の神である「塩椎神」（シオツチノカミ）が突如姿を現し、弟「遠理命」の事情を聴くと、「「塩椎神」は竹で隙間のない籠を造り「遠理命」を乗せました。そして「遠理命」に向かって「この船で潮の流れに身を流せば、その内ウロコのような屋根をした海神「綿津見神」（ワタツミノカミ）の宮殿が見えてくる。そしたらその門のそばにあるカツラの木に座っていれば、「綿津見神」の娘があなたを助けてくれるだろうから」と言った。
「遠理命」は「塩椎神」に言われた通り潮の流れに載ると、そのまま「綿津見神」の宮殿へと向かいました。
そして言われた通り、門のそばにあるカツラの木に座っていると、先ず最初に「綿津見神」の娘の「豊玉毘売」の侍女が水を汲みに現れました。「遠理命」は侍女に「水がほしい」と言うと、水を容器に入れて「遠理命」に渡しました。すると「遠理命」は、決して水を飲むのではなく、首にかけていた玉を口に含み、その容器に玉を吐き出しました。すると何故か玉は容器から離れません。侍女は急いで姫の元に戻り、事情を説明しました。不思議に思った「豊玉毘売」は、「遠理命」の姿を見に現れるや「遠理命」の姿に一目惚れをしてしまいました。すぐさま「豊玉毘売」は海神「綿津見神」に事情を話し、天孫と知るや「綿津見神」も「遠理命」を受け入れ、豪勢なもてなしをし「豊玉毘売」と結婚させました。
そんな「遠理命」が「綿津見神」の宮殿に来て早3年が経ったある日のこと、「遠理命」はふと自分がこの地に来た理由を思い出しました。兄「火照命」の釣り針を探すために来ていたのですが、忘れていて「遠理命」は深いため息をつくと、それを見ていた「豊玉毘売」は、父の「綿津見神」に相談しました。

「綿津見神」に事情を話すと「綿津見神」は魚たちを呼び集め「釣り針を知らないか」と尋ねました。すると赤鯛が喉に何かが引っ掛かり、物を食べにも難儀をしていることを知りました。そしてその赤鯛を調べると、「遠理命」がなくした釣り針が出て来ました。
「綿津見神」はこの釣り針を「鹽盈玉」（しおみちたま）と「鹽乾玉」（しおひのたま）と共に「遠理命」に手渡すと、更に「この釣り針を兄「火照理命」に返す時『この針はほぼ針、すす針、貧針、うる針（憂鬱になる針、心が落ち着かなくなる針、貧しくなる針、愚かになる針）』と言いながら、手を後ろに回して渡しなさい」と助言した。また「この釣り針を帰す時、兄「火照理命」は高い所に土地に田を作ったら、あなたは低い土地に田を作り、兄が低い土地に田を作ったらあなたは高い所に田を作りなさい。そして、もし兄が攻め来るようなことがあれば、「鹽盈玉」で兄を溺れさせ、苦しん

で許しを請うて来たら「鹽乾玉」で命を助けなさい」と付け加えました。この二つの玉は、潮の満潮・干潮を示しているとも言われ、こうして当初の目的を達した「遠理命」は、「綿津見神」の用意した和邇（ワニ）に乗って、国元に帰って行きました。

「遠理命」は早速、兄の「火照理命に釣り針を帰し、田を耕しました。すると「綿津見神」が水源を取り仕切って入るため、兄「火照理命」の田には水が行き届かず、日増しに貧しくなってゆきました。すると「火照里命」は心も荒れ始め「遠理命」の元に攻め込んできました。そこで「遠理命」は「綿津見神」に言われた通り「鹽盈玉」で「火照理命」を溺れさせ、許しを請うと「鹽乾玉」を使って「火照理命」を救出しました。

これを何度か繰り返すことで「遠理命」が「火照理命」を完全に屈服させることに成功しました。これにより以来「火照理命」は、弟である「遠理命」の下に組することを誓いました。

そして「遠理命」が持ったある日、「豊玉毘売」が一人で「綿津見神」の宮殿から「遠理命」を訪ねてきました。話を聞くと、どうやら「豊玉毘売」は「遠理命」の子を授かり、出産を間近に控えたので、陸地で住む為にやって来たという。そしてこの子は天津神の子である以上、海の中ではなく陸地で生むべきであるとという考えによるものだという。この為「遠理命」は、鵜の羽根を使って産屋を建て始めましたが、まだ完成しない内に「豊玉毘売」は産気づいてしまいました。そして「豊玉毘売」は産屋に入るや否や「遠理命」に「この子を産むためには、私も元の姿にならなければなりませんので、決して産屋の中を見ないで下さい」と言い渡しました。

ところが「遠理命」は「豊玉毘売」の忠告を守らず、未完成の産屋の壁の隙間からこっそり中を覗いてしまいました。

そこで「遠理命」の目に映ったのは、出産の為に苦しみのたうち回る巨大な和邇（ワニ・サメ）の姿でした。

これを見て驚いた「遠理命」は、その場をみげ出してしまいました。「豊玉毘売」はそんな「遠理命」の姿に失念しながらも、無事にしゅっさんを成し遂げ「豊玉毘売」は、子を残して「綿津見神」の宮殿に帰って行きました。しかし、我が子を思う心は変わりなく、母の代理として妹の「玉依毘売命」（タマヨリビメノミコト）を遣わし、こそだてを願うのでした。その子供は後に成長し、この鵜の羽根を使った建設途上の産屋で生まれた神として「鵜草葺不合命」（ウガヤフキアエズノミコト）と名付けられた。

日本国の誕生　初代天皇「神武天皇」とは

こうして天孫降臨に始まった「瓊瓊杵尊」から、海神の力を得た「遠理命」、そしてその子「鵜草葺不合命」三世代は、日向三代（ひむかいさんだい）と呼ばれるようになり、その後成長した「鵜草葺不合命」は、自身で育ての親であるはずの叔母「玉依毘売命」を妻として四柱の御子をもうけて行きました。それが「五瀬命」（イツセノミコト）、「稲飯命」（イナヒノミコト）、「御毛沼命」（ミケヌノミコト）、「若御毛沼命」（ワカミケニノミコト）という四柱でした。この内「御毛沼命」は、常世の世界へ渡り、「稲飯命」は母が育った海原へと戻って行きました。そして残った長兄と末弟の二柱の神に引き継がれ、「若御毛沼命」」は後に、「神倭伊波礼琵琶古命」（カムヤマトイハレビコノミコト）となり、初代天王たる「神武天皇」となります。

神武天皇の東征図

本資料作成にあたり、「神社人」・「神社本庁」「古事記 FUN」「古事記と日本書紀」等を参考に作成しました。挿入のイラストについては、インターネットより引用しました。

製作・編集　上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会　会員）

090−3545−1113